

研究ノート

本学の成人クリティカルケア実習における 教育的介入の手がかりについての検討 —ルーブリックを用いた学生と教員の評価の分析から



生田 宴里, 荒川千登世, 山根加奈子, 伊藤あゆみ, 中川 美和, 横井 和美, 糸島 陽子
滋賀県立大学 人間看護学部

本学の成人クリティカルケア実習の学生の自己評価と教員の総合評価を分析し、ルーブリック導入前後の比較から当実習における教育的介入の手がかりを検討した。

対象は2013年度（ルーブリック導入前）と2014年度（導入後）の当実習の単位を修得し同意が得られた学生120名（2013年度：59名、2014年度：61名）の自己評価と教員の総合評価とした。

各年度の学生の自己評価と教員の総合評価の点数差（絶対値）を分析した結果、2013年度で6（2-11）、2014年度で4（2-7）となり、ルーブリック導入後は学生と教員が目標を共通認識し、客観的に評価できるようになったと考える。また、教員評価に比べて自己評価が高い群は、「心理的ストレス状況の理解（自己評価レベル3/教員評価レベル2）」、「看護者としての自己評価・今後の課題（4/2）」の評価が高く、自己評価が教員評価に比べて低い群は、「侵襲と生体反応・回復過程の理解（2.5/3.5）」、「看護計画の立案（2/3）」、「看護の客観的評価（2.5/3）」の評価が低かった。

今後の課題は、学生が科学的に対象の心理・社会的側面を理解できるようサポートすること、目標の到達度を適宜フィードバックし学生の自己効力感を支えることが必要であると考えた。

I. 緒言

近年の医療技術の進歩、グローバル化や情報化の進展、少子高齢化など、医療を取り巻く環境の急速な変化にともない、看護にも高度な知識・技術・実践能力が求められる。2008年に公表された「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会大学分科会）では、「グローバル化する知識基盤社会において、学士レベルの資質能力を備える人材養成は重要な課題である」と述べられている。

Investigation of clues for educational intervention in Clinical Practicum in Adult Critical Care
—Analysis of the self-evaluation of the student and the teacher evaluation using Rubric

Eri Ikuta, Chitose Arakawa, Kanako Yamane, Ayumi Ito, Miwa Nakagawa, Kazumi Yokoi, Yoko Itojima

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2015年9月30日受付、2016年1月9日受理

連絡先：生田 宴里

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail：ikuta_e@nurse.usp.ac.jp

特に、看護学生にとって臨床実習は看護職に就くものとして講義で得た基本的な知識、技術及び態度を自らの体験を通し学ぶ上で不可欠なものであるため、看護基礎教育における看護実践能力の育成にとって重要な位置を占めるものである。

学士課程教育における学修成果の評価については、これまで種々の取り組みがおこなわれてきた。2011年に改正された大学設置基準の第二十五条の二「成績評価基準等の明示等」に、「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。」と明記されている。また、2012年に公表された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」(中央教育審議会答申)には、学士過程教育の質的転換のための具体的方策の一つとして、学修成果の客観的な評価手段を明確化することが明示されている。

このような状況のなか、近年、成績評価方法としてルーブリックが重要視されている。ルーブリックとは、評価指標と、評価指標に即した評価規準のマトリックスで示される配点表をもちいた成績評価方法のことである。こ

のルーブリックを導入することにより、学生は到達すべき目標や自己の課題を明確にすることができるとともに、教員と学生が共通認識をもって同じ目標にむかって課題に取り組むことができると考える。

今回は、成人クリティカルケア実習の学生の自己評価と教員の総合評価を分析し、当実習における教育的介入の手がかりについて検討する。

II. 研究方法

1. 対象

2013年度（ルーブリック導入前）および2014年度（ルーブリック導入後）の「成人クリティカルケア実習」の単

位を修得し、研究の趣旨に同意が得られた学生120名（2013年度：59名、2014年度：61名）の、学生の自己評価と教員の総合評価を分析対象とした。教員の総合評価は、複数の教員と臨床指導者による総合評価である。

2. 方法

1) ルーブリック導入前後における学生・教員間の評価の差

2013年度と2014年度の学生の自己評価と教員の総合評価の点数差（絶対値）を比較する。なお、2014年度の成人クリティカルケア実習の成績評価は、ルーブリックを導入した表1の成績評価表をもちいておこなった。

表1 平成26年度 成人クリティカルケア実習 成績評価表（抜粋）

到達目標	成績評価基準				
	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
1. 周手術期にある患者の病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程に関する基礎的理解ができる。	周手術期にある患者の、基本的な病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程に関する知識について、説明できない。	周手術期にある患者の、基本的な病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程について、説明できる。	周手術期にある受け持ち患者の、病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程について、説明できる。	周手術期にある受け持ち患者の、病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程について、科学的根拠にもとづいて述べることができる。	周手術期にある受け持ち患者の、病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程について、科学的根拠にもとづいて説明できる。
2. 周手術期にある患者とその家族（重要他者）の心理的ストレス状況の理解と対処への働きかけを理解できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の基本的な心理的ストレス状況とその対処への働きかけについて説明できない。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の基本的な心理的ストレス状況とその対処への働きかけについて説明できる。	周手術期にある受け持ち患者とその家族（重要他者）の心理的ストレス状況とその対処への働きかけについて説明できる。	周手術期にある受け持ち患者とその家族（重要他者）の心理的ストレス状況とその対処への働きかけについて、科学的根拠にもとづいて述べることができる。	周手術期にある受け持ち患者とその家族（重要他者）の心理的ストレス状況とその対処への働きかけについて、科学的根拠にもとづいて説明できる。
3. 急性期、回復期、社会復帰における患者とその家族（重要他者）への看護計画を立案できる。	受け持ち患者とその家族（重要他者）に対する基本的な看護計画を立案できない。	受け持ち患者とその家族（重要他者）に対する基本的な看護計画を立案できる。	受け持ち患者とその家族（重要他者）の個性をふまえた看護計画を立案できる。	受け持ち患者とその家族（重要他者）の個性をふまえた看護計画について、科学的根拠にもとづいた援助の方法を導き出すことができる。	受け持ち患者とその家族（重要他者）の個性をふまえた看護計画について、科学的根拠にもとづいた援助の方法を創造できる。
4. 周手術期にある患者とその家族（重要他者）の生命と権利を尊重した看護を実施できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の生命と権利を尊重した看護を実施できない。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の生命と権利を尊重した看護を説明できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の生命と権利を尊重した看護を、その時の状態に合わせて実施できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の生命と権利の尊重した看護を、回復過程に応じて（時間経過の中で）実施できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の回復を促す援助を創造できる。
5. 実施した看護に対して、客観的に評価できる。	実施した看護による患者への影響について、述べることはできない。	実施した看護による患者への影響について、述べることはできる。	実施した看護による患者への影響について、客観的に述べることはできる。	実施した看護について、科学的根拠にもとづいて述べることができる。	実施した看護について、科学的根拠にもとづいて説明できる。

到達目標	成績評価基準				
	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
6. 周手術期の患者の援助をとおして、医療チームや学生グループにおける自己の役割・責任にもとづく行動をとれる。	自己の役割・責任について説明できない。	自己の役割・責任にもとづく行動について説明できる。	自己の役割・責任にもとづく行動がとれる。	チーム全体の状況を考慮して、自己の役割・責任にもとづく行動がとれる。	自己の役割・責任にもとづく行動をとり、協働して自己の役割・責任にもとづく行動がとれる。
7. 周手術期の看護について、看護および看護に関連する概念や理論を活用し、論理的に洞察する。	看護および看護に関連する概念や理論を活用し、実施した看護を振り返ることができない。	看護および看護に関連する概念や理論を活用し、実施した看護を振り返ることができる。	看護および看護に関連する概念や理論を活用して実施した看護を振り返り、新たな気づきを述べるができる。	看護および看護に関連する概念や理論を活用して実施した看護を振り返り、新たな気づきを説明できる。	看護および看護に関連する概念や理論を活用して実施した看護を振り返り、生命の危機的状況にある患者とその家族の看護について洞察する。
8. 周手術期にある患者とその家族（重要他者）の看護をとおして、自己の看護への思いを表現できる。	実施した看護をとおして、自己の看護への思いを述べるができない。	実施した看護をとおして、自己の看護への思いを述べるができる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の看護をとおして、自己の看護への思いを述べるができる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の看護をとおして、自己の看護への思いを記述できる。	周手術期にある患者とその家族（重要他者）の看護をとおして、自己の看護への思いを説明できる。

2) 本学の成人クリティカルケア実習における教育的介入の手がかりについて

1) で使用した2014年度のデータから学生の自己評価と教員の総合評価の点数差が第3四分位数の7より大きい16名を抽出して「教員の総合評価より学生の自己評価の点数が高い」群（以下、「自己評価>教員評価」群）（8名）、「学生の自己評価より教員の総合評価の点数が高い」群（以下、「自己評価<教員評価」群）（8名）にわけ、第3四分位数が7より小さい45名を「自己評価=教員評価」群とした。そして、その3群について8つの到達目標ごとに評価（成績評価基準の5段階のレベル）を分析した。

3. 分析方法

2013年度と2014年度の学生の自己評価と教員の総合評価の点数差（絶対値）を比較するにあたり、各年度の中央値と四分位範囲を算出して比較した。

今回は、本学の成人クリティカルケア実習における教育的介入の手がかりについて検討することを目的としているため一般化のための統計学的検定はもちいない。また各年度のデータはノンパラメトリックであることから、中央値と四分位範囲をもちいて比較した。

4. 倫理的配慮

大学倫理審査委員会承認後、対象者に研究の趣旨を説明し実習成績表の使用について口頭と紙面で同意を得た。また、研究の参加・不参加による成績への影響はまったくないことを説明した。

III. 研究結果

1. ルーブリック導入前後における学生・教員間の評価の差（図3）

学生の自己評価と教員の総合評価の点数差（絶対値）の中央値は、2013年度は6（2 - 11）（図1）、2014年度は4（2 - 7）（図2）であった。また、点数差の平均値は、2013年度は7.1 ± 0.75、2014年度は5.2 ± 0.55であった。

2. 本学の成人クリティカルケア実習における教育的介入の手がかりについて

「自己評価>教員評価」群（図4）は、8つの到達目標のすべてにおいて教員の総合評価より学生の自己評価が高かった。特に、到達目標2「周手術期にある患者とその家族（重要他者）の心理的ストレス状況の理解と対処への働きかけを理解できる。」では学生の自己評価の中央値3に対し教員の総合評価の中央値2、到達目標8「周手術期にある患者とその家族（重要他者）の看護をとおして、自己の看護への思いを表現できる。」では学生の自己評価の中央値4に対し、教員の総合評価が2という結果であった。

一方、「自己評価<教員評価」群（図5）は、8つの到達目標のすべてにおいて教員の総合評価より学生の自己評価が低かった。特に、到達目標1「周手術期にある患者の病態生理、手術治療や麻酔法とその影響、回復過程に関する基礎的理解ができる。」では学生の自己評価の中央値2.5に対し教員の総合評価の中央値3.5、到達目標3「急性期、回復期、社会復帰における患者とその家

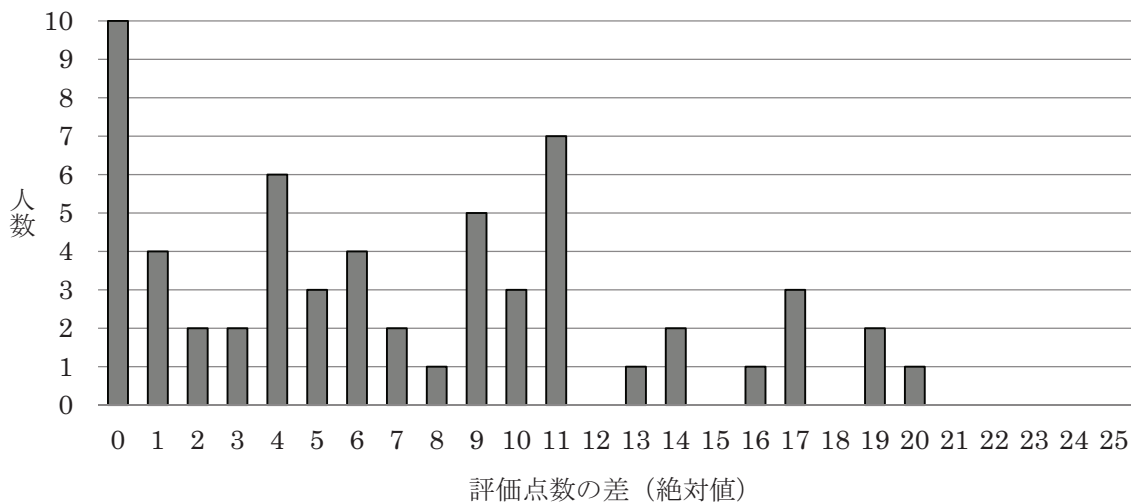


図1 2013年度 成人クリティカルケア実習 学生の自己評価と教員総合評価点数の差（絶対値）

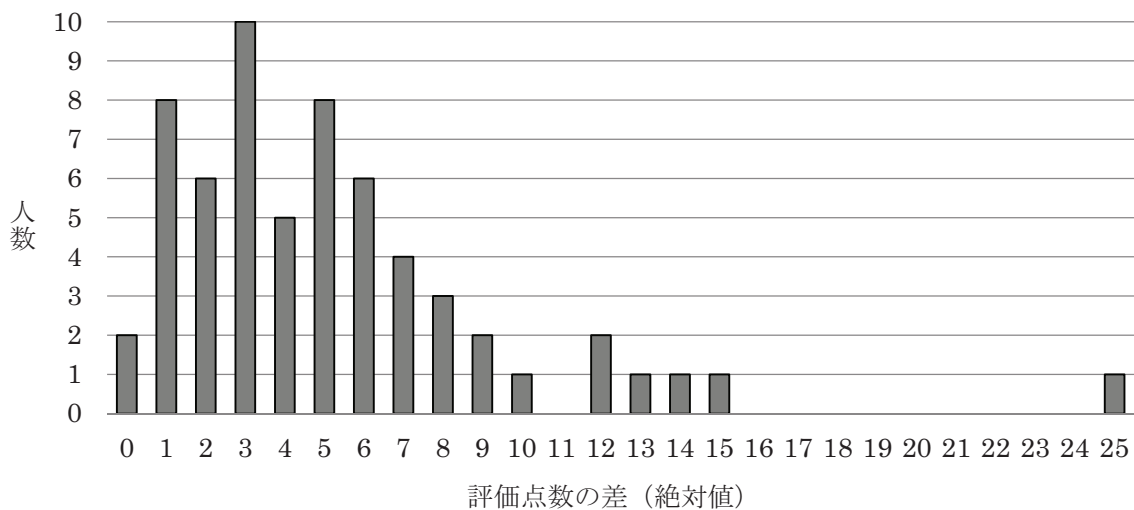


図2 2014年度 成人クリティカルケア実習 学生の自己評価と教員総合評価点数の差（絶対値）

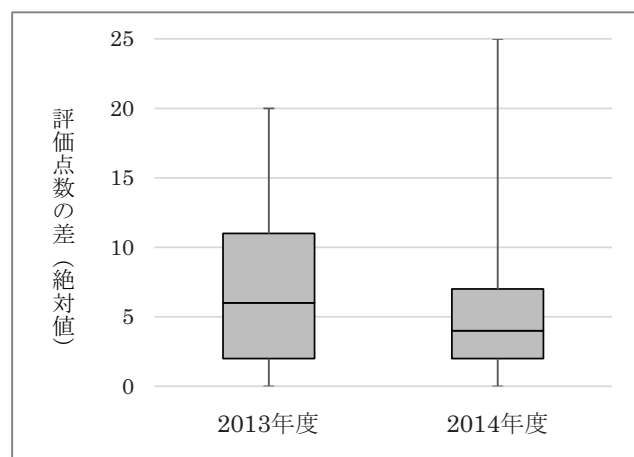


図3 成人クリティカルケア実習 学生の自己評価と教員総合評価点数の差（絶対値）

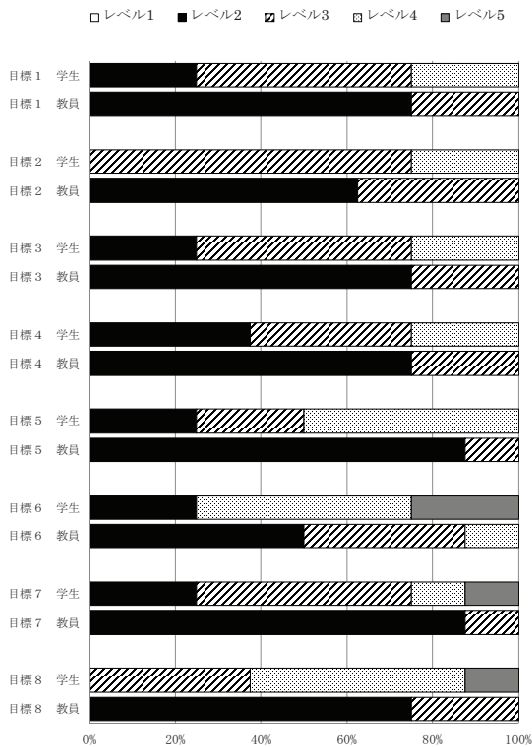


図4 2014年度 成人クリティカルケア実習評価 学生と教員の比較 (-25点~-7点の差)

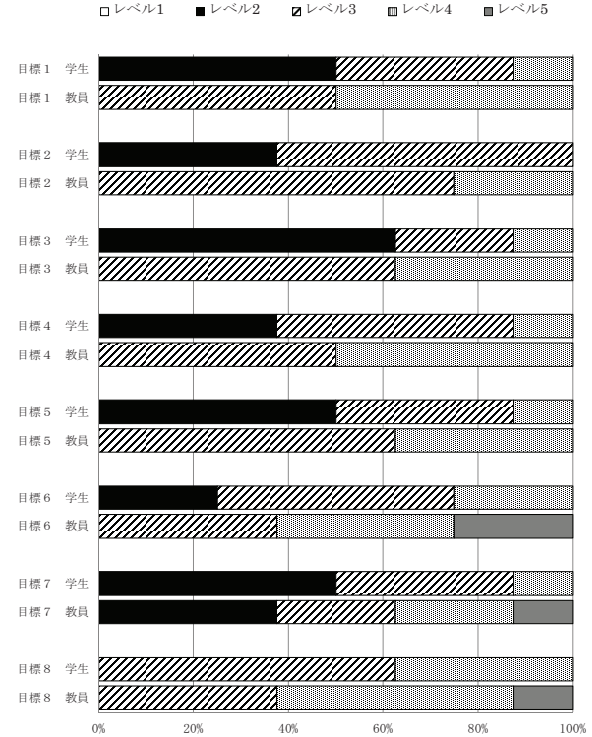


図5 2014年度 成人クリティカルケア実習評価 学生と教員の比較 (+7点~+15点の差)

族(重要他者)への看護計画を立案できる。」では学生の自己評価の中央値2に対し教員の総合評価の中央値3、到達目標5「実施した看護に対して、客観的に評価できる。」では学生の自己評価の中央値2.5に対し教員の総合評価の中央値が3という結果であった。

また、学生の自己評価と教員の総合評価にあまり差がない「自己評価=教員評価」群(図6)においても、到達目標5「実施した看護に対して客観的に評価できる。」ではレベル2の評価が学生で約33% (15名)、教員で約18% (8名)、到達目標6「周手術期の患者の援助をとおして、医療チームや学生グループにおける自己の役割・責任にもとづく行動をとれる。」ではレベル5の評価が学生で20% (9名)、教員で約38% (17名)という差を認めた。

IV. 考察

1. ルーブリック導入前後における学生・教員間の評価の差

2014年度の学生・教員間の評価点数の差が縮小したことから、ルーブリックの導入によって、学生と教員が目標を共通認識し、客観的に評価できるようになったと考

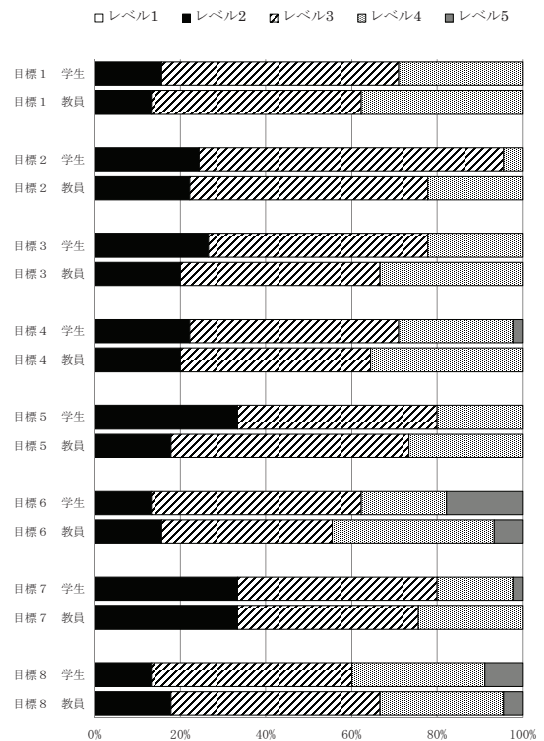


図6 2014年度 成人クリティカルケア実習評価 学生と教員の比較 (-6点~+6点の差)

える。

2. 本学の成人クリティカルケア実習における教育的介入方法の課題

まず「自己評価>教員評価」群は、特に心理・社会的側面の理解、看護者としての自己評価と課題についての評価が高い傾向を認めた。これは、心理・社会的側面を捉えることについて、教員はストレスコーピング理論やセルフケア理論などをもちいて対象を科学的に理解することを求めているが、学生は表面的・短絡的に捉えがちであるため、到達目標についての認識に隔たりが生じていると考えられる。また、看護者としての自己評価が高いことについては、学生に対し到達目標ごとの達成度を適宜フィードバックし、客観的な評価をおこなうことが必要であると考えられる。しかし、学生にとって臨地実習の第1週目は周手術期にある受け持ち患者の身体的側面を理解することで精いっぱい状況であり、到達目標ごとに達成度を振り返るための時間を設けることも難しい。そのため、第2週目になってようやく心理・社会的側面に注目することで、自分自身の看護を客観的に振り返ることができるという現状である。学習面については、本来ならば臨地実習開始までの講義・演習のなかで学生自身が事前学習して準備を整えておくことが必要不可欠であるが、実際に患者を受け持って経験することでしかその重要性に気づくことができない学生も少なくない。そのため、臨地実習に臨むまでの段階でレディネスを高めるための教育的介入について検討する必要がある。また、実習中の学生への到達目標ごとの客観的な評価については、鈴木らが、成人看護学実習における「中間評価により、実習の結果に対して自己の努力不足などの原因と今後の方向性を考え、主体的に学習ができた学生は、自らの目標達成そのものをめざす行動を引き起こす動機を高めることができる」と報告している。(鈴木ら、2005)そのため、到達目標ごとに達成度を評価して学生にフィードバックするための具体的な実施時期や方法について検討する必要がある。

次に「自己評価<教員評価」群は、身体的側面の理解と看護過程の展開について自己評価が低いことから、実習中の看護実践について自信がなく不安が大きいために推察される。また、自己の課題に気づくことができるが故に自己評価を低くする傾向があるのではないかと考える。

最後に、学生の自己評価と教員の総合評価にあまり差

がない「自己評価≒教員評価」群であるが、到達目標別にみると、特に到達目標5と到達目標6で評価の差を認めた。これらの2つの項目は、教員の総合評価に比べて学生の自己評価が低いという結果であったため、学生ができていないことは適宜フィードバックして伝えていくことにより、学生の自己効力感を支えることが大切であると考えた。

V. 結 語

今後の課題として、科学的根拠にもとづき対象の心理・社会的側面を理解できるようサポートすること、目標に対する到達状況を適宜フィードバックし、学生の自己効力感を支えることが必要であると考えた。

文 献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会：学士教育過程の構築に向けて（審議のまとめ）、2008年3月25日
- 2) 大学設置基準（最終改正：平成24年5月10日文部省科学省令第23号）：第六章第二十五条
- 3) 文部科学省 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）、2012年8月28日
- 4) 高浦勝義：絶対評価とルーブリックの理論と実際、第1版、2004、株式会社黎明書房
- 5) ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ（著）、佐藤浩章（監訳）、他：大学教員のためのルーブリック評価入門、2014、玉川大学出版部
- 6) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会 大学教育部会：学士課程教育に関するこれまでの大学審議会答申等の主な提言について
- 7) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会 大学教育部会（第8回）：濱名委員説明資料、2011年12月9日
- 8) 沖裕貴：大学におけるルーブリック評価の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—、立命館高等教育 第14号、71-90、2014
- 9) 鈴木はるみ、澁谷貞子：成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連（その2）、桐生短期大学紀要16号、37-42、2005